

散骨ドライブ

中村由加里

* 人物表

増田茂雄 (65) (20代)
増田頼子 (63) (20代)
大西薫 (63)

警察官
タクシー運転手
トラック運転手
看護師
教師
ホテルマン
海洋散骨プランナー

* あらすじ

人付き合いが苦手な元教師の増田は、亡くなった妻・頼子の遺言により小樽の海に遺骨を散骨するためのドライブに出掛ける。助手席には、頼子の文通相手の大西薫という男。大西薫を女性だと思っていた増田は、長年に渡り頼子に裏切られていたような複雑な思いでハンドルを握る。大人として振る舞おうとしつつ、頼子について知っていることを自慢し合ったり僻んだりといった言い合いに。やがて二人は決裂したり、土砂崩れで通行止めになったりと次々と困難に見舞われる。宿泊することになったホテルで増田は我慢の限界に。大西に向かって怒りや悲しみなどこれまで抑えていた感情を爆発させる。同時に頼子に対して抱えていた罪の気持ちも吐露。翌日、無事に小樽港から海原へ出て、頼子の散骨をした増田は、頼子が言っていた「最後のプレゼント」の意味に気が付く。大西という人間が、妻以外に心許す友のいない自分へのプレゼントだったのかもしれないと。

頼子の声「私が死んだら、ノートに書いた通りにしてね。最後のプレゼントよ」

車のエンジンをかける音、走り出す車。

増田（モノローグ、以下MO）「妻の頼子が死んだ。病と分かった時からたった一年で」

街中を走行する車の中の振動音。

ラジオをチューニングしている。

増田（MO）「妻が残したエンディングノートの、骨は小樽の海に散骨して欲しいと書かれてあった。妻が生まれ育った街だ。意外な希望だったが、気持ちにはわかんない。もちろん叶えてやる。しかし……ノートにはもう一行、理解できない言葉があったのだ」

流行の歌が一瞬間こえるがすぐ雑音になったり、アナウンサーの声になったりしてまた雑音になる。

増田「気が散るんでどこかに決めるか、消すか、どっちかにしてもらえませんか？」

大西「はいはいオッケー、すみません」

ラジオの音が止まる。
車の走行音だけが響く。

大西「……疲れたら替わりますよ、運転」

増田「結構。私の家内の用事ですから」

大西「やだな、そんな他人行儀にしなくても」

増田「他人様です」

大西「いや、僕と頼子とは長年の……」

増田「（遮って）あの、頼子頼子って人の妻を呼び捨ては、非常識ではありませんか？」

大西「ねえ、ご主人なにか怒ってます？」

増田（MO）「この不愉快な男は大西薫。妻

の高校時代の同級生で、イタリア在住のチエリストだ。文通相手だった大西薫を、私は女性だと思い込んでいた。『大西薫と私の2人で散骨して欲しい』というノートの記述を見た時もまさか男だとは思わず……」

大西「何度も言ったように文通以外は、何度かコンサートに来てくれてただけですよ」

増田「女性だとばかりと思ってましたね」

大西「……またその話。……しつこいなあ」

増田（MO）「頼子は真面目で貞淑な妻だった。その頼子が、こんなに加減で無礼な男にいったいどんな手紙を書いていたのか」

大西「あ！ 前！」

急ブレーキをかける音。

大西「痛っ！ 危ないじゃないですか！」

増田「失礼、ちよっと考え事してて」

大西「あー、後ろ、遺骨の箱、下に落ちてますよ。やっぱり僕の膝の上、載せますよ」

増田「いやダメです、膝の上なんて」

大西「へえ……散骨用の骨って、サラサラのパウダー状になって小さな袋に小分けしてあるんだ。袋のまま海に撒くんですか？」

増田「ちよっと、頼子にさわらないで下さい。あなたが後ろに乗って、頼子を助手席に置いてくれればいいんですよ」

大西「だから、後ろ狭いんですって」

増田「あんなでっかいの持ってくるから」

大西「でっかいのじゃなくてチエロ。僕の相棒を馬鹿にしないでもらいたい」

増田「何だって持ってくるかなあ」

大西「散骨の瞬間、弾いてあげるんでね」

増田（MO）「昔、何度か頼子に大西薫のコンサートには誘われた。しかし音楽に興味のない私は一度も行ったことはない。いや、音楽に興味なかったのではなく頼子に興味を持ってなかったのか。あの頃から……」

玄関ドアの開閉音。

テレビがついている。

台所で支度している音。

頼子「あ、お帰りなさい」

増田「……ただいま」

頼子「すぐ用意するねー」

増田(MO)「定年前、中学の社会科教師だった私は、野球部顧問もしていたため、いつも帰りが遅かった」

椅子に座り、コップにビールを注ぐ。
一気に飲み干し、テーブルに置く。

頼子「今日ね、書道教室に新しい生徒が二人も増えたのよ。ロコミって言うの？ やっぱり美人書道家である私の腕かしらねえ」
増田「ああ」

頼子「ねえ、今度の土曜日。ほら、大西さんのコンサートがあるの。一緒にどう？」
増田「ああ……土曜日はゆつくりさせてくれ」
頼子「(がっかり) そう……あ、ビールも一本、飲む？」
増田「いや、いい。風呂、入ってくる」

部屋のドアの開閉音、出ていく足音。
頼子のため息。
食器を片づける音、次第に遠くなる――
店員の注文をとる声、客のざわめき。
有線ラジオの音楽がかかっている。
ラーメンをすすする音。

大西「いやあ、こういうラーメンがね、食べたかったんです。向こうにもあることはあるんですけどこういう感じのが好きでね」
増田「よくわかりませんが」
大西「長年住んでてもやっぱり日本の食事が

よくて。来年にはこっちに戻るつもりなんです。こっちのオケに誘われてましてね。誘われるうちが花つて言うでしょう？」

増田(MO)「よく喋る男だった。そして喋ることはすべて私の勘に触った」

コップの水を継ぎ足し、一気の飲み干してテーブルに置く。

大西「ところで彼女、最後に何食べました？」

増田「は？」
大西「最後の晚餐ですよ」
増田「晚餐って……自宅で倒れてからずっと病院でしたから、普通に病院の……」
大西「ええっ!?! 可愛そうだな」
増田「何がですか」
大西「最後の晚餐、あした死ぬなら何が食べたいかって、昔よく話してたんです。頼子は食べるのが大好きだったでしょう？」

増田「そうかな」
大西「ラムステーキ、きつとラムステーキ食べたかったんじゃないかな。彼女の好物だ」
増田「ラム? まさか。むしろ苦手ですよ」
大西「(カチンと来て) じゃあ、何が好きだったって言うんです? 頼子は」

増田「さあ……グレープフルーツ……とか」
大西「はあ? それは違うな。何年も一緒に居て、そんなこともわからないんですか?」
増田「なんであなたにそんなこと」

大西「かわいそうに、あなた、頼子のことちゃんとかわかってたんですか?」
増田「ちよつと! 失礼でしょう?」
大西「あなたこそ頼子に失礼だ!」

乱暴に席を立つ音。
食器の当たる音。

大西「ここからは別々に行きましょう!」

駆け寄って来る足音。

店員「あの、お客様!」
増田・大西「何ですか!」
店員「駐車場の白いセダン、お客様の車ですか? 今、トラックが突っ込んで……」
増田・大西「ええっ!」

トラックのエンジン音。
「ああ、ひどいなこりゃ」などと野次馬達のざわめき。
走ってくる足音。

増田「ちよつと、どいて下さい!」
トラック運転手「この車の方ですか! すみません!」

増田「大事なものが入ってるんだ!」
車のドアを開ける音。

大西「どうですか？ 大丈夫ですか？」

増田「ええ、あなたのチェロも大丈夫。ちょっと出しますから、頼子の箱、持って下さい、よいしょ」

大西「はい……ああ、それ引きずらないで」

増田「わかってますって。結構重いな……」

トラック運転手「あの、すみません、今警察

呼んでますから……」

増田「……とにかく、保険会社電話しなきゃ。

携帯……あれ？」

有線がかかっている。

食器を下げている音。

自動ドアの開閉し、駆け込んでくる。

増田「ここにあった財布と携帯は？」

店員「え……何もありませんでしたよ」

増田「そんなバカな」

増田(MO)「トラックにつぶされた車はそのまま修理工場行き。おまけに財布と携帯を盗まれる。こんなことがあっていいのか」

雨が降り出す。

警察官「じゃあ、また不明なことがありますから」

増田「……よろしくお願いします」

立ち去る足音。

深いため息。

大西「さてと。どうしましょうかね」

増田「今タクシー呼びますから」

大西「財布もないの？」

増田「あつ……」

大西「別々に行くついでにいいんですよね」

増田「その……」

大西「どうせ私は他人ですからね」

増田「(小声で)貸して、下さい」

大西「え？ 聞こえませーん」

増田「タクシー代、貸してもらえますか！」

大西の笑い声。

増田(MO)「屈辱的だった。疫病神め」

タクシーの中、車の振動音。

交通情報を告げるラジオの音。

運転手「お客さん、後ろ狭くない？ 何入って

んの、その箱？」

増田「あ、これは、遺骨です。妻の」

運転手「そんなもん持って海行くの？」

大西「散骨。知ってます？ 海に撒くんです」

運転手「へえ。私も去年かみさん見送りました

たけど鳥の餌じゃあるまいし、粉にしてど

つか撒いちやうなんて考えられないねえ」

増田「……鳥の餌」

大西「運転手さん、これ本人の希望なんです」

運転手「へー。変わってるねえ。旦那や家族と死んでまで一緒に居たくないってことかい……普通じゃないわ」

増田「(ぼそりと)そうかもかもしれない……」

大西「(強く)そんなことない！」

運転手「え？」

大西「彼女は変わり者でも何でもありません！ 素

直で真っ直ぐで心のキレイな人なんだ。何

にも知らないくせに勝手なこと言うな！」

運転手「何、急に……？ すみません」

増田(MO)「私の代わりにその男が頼子を

庇った。情けなくて死んでしまったかった」

激しくフロントガラスに打ち付ける雨。

運転手「あれ？ あれえ、前、土砂崩れだわ。

……船も、この天気じゃ無理でない？」

大西の携帯電話が鳴り、出る。

大西「はい、今日は欠航？ 明日に延期？」

大雨の音。

増田(MO)「私は後悔していた。強がって、格好つけてこんな男と一緒に来たことを。散々な目に合った上に……」

自動ドアの開閉音。

ホテルマン「いらっしやいませ。二名様ご泊、ですね」

客室のドアを開ける鍵の音。

大西「良かったですね。部屋、すぐ取れて」
増田「(イライラと) なんで同じ部屋なんだ」
大西「仕方ないでしょう？ 空いてなかったんですから。あ、頼子はそこに置きましたよ」

箱を机に置く音。

大西「不思議なもんですね。こうしていると頼子と3人で旅してるみたいだ」

増田「……冗談じゃない」

大西「え？」

増田「私、いったいこんな所で何やってんだ」

大西「ちよつと？ 何？ どうしました？」

増田「別に……あなたに私の気持ちなんか」

大西「どうしたんです？」

増田「私は40年間も妻に騙されてた。何不自由ない生活とまでは言えなくても世間に恥ずかしくない生活はさせた。なのに頼子は私を裏切つてあなたみたいなの……」

大西「文通してただけでしょうが」

増田「そのほうがタチが悪い！ しかも一緒に散骨だなんて、二人で私を馬鹿にしてるとしか思えない！」

大西「いい加減にしてくれ！」

増田「な、なんだと？」

大西「あなたは生きてる間に頼子とちやんと向き合えなかったことを後悔して人のせいにしてるだけじゃないんですか」

増田「わかったようなこと言うな。頼子は私の妻だ。横入りしてきたくせに偉そうに！」

大西「横入り？ 知り合ったのは僕が先だ！

こんな女々しい教師の生徒は気の毒だね」

増田「今話してるのは妻の話だ！ 侮辱だ！」

大西「同じだよ。あなたは自己中で、頼子以外に心を許せる相手もいないんだろ？」

増田「もう我慢できない。私は帰る！ 頼子はくれてやる。そっちで勝手にしてくれ！」

乱暴にドアを開けて出て行く。

大西「おい！ どこ行くんだ。頼子は？」

増田「放せ！ あなたの手で散骨してやれ。フン、どうせ俺なんか」

大西「また逃げるのか！」

増田「……え？」

大西「また逃げるのかって聞いてんだよ」

増田「……何のことだ」

大西「あなた一度頼子から逃げたんだろ？」

増田(MO)「大西の言葉は私を一瞬にしてあの日に戻した——」

「そこで、井伊直助は安政の大獄を」と授業をする増田の声、チョークの音。

がらりと戸が開く音。

教師1「増田先生！ 奥さんが大変です！」

慌てて飛び出して行く。

増田MO「頼子は妊娠5か月だった。買い物帰りに転んで、それで……」

病院処置室の機械音。

廊下を走ってくる足音。

増田「妻は、頼子は？」

看護師「大丈夫。幸い、すぐに運ばれたので、一日入院すれば帰れますよ」

増田「あの、お腹の子は無事なんですか？」

床に倒れ込む音。

看護師「増田さん、大丈夫ですか？」

増田「(涙声) そんな……そんな……」

心電図の音。

看護師「増田頼子さん、目が覚めました？」

頼子「はい……これ……グレイプフルーツ？」

看護師「ああ、ご主人が置いて行かれましたよ。好物だからって」

頼子「主人はどこへ……？」

看護師「お仕事、どうしても戻らなきゃなら

ないって。大変ですねえ、お仕事」

グラウンドで練習する野球部員の声。

教師1「あれ？ 増田先生、戻って来たんですか？ 奥さん、大丈夫なんですか？」

増田「ええ……まあ」

増田(MO)「私は逃げた。頼子の顔を見て励ます自信がなかった。すべてを受け止める優しさもなく逃げた。私は最低な夫だ」

鳥のさえずり。

病室の戸を開ける音。

増田「昨日は悪かったね。学校、どうしても戻らなきゃならなくて……体、大丈夫か？」

頼子「……うん」

増田「いや、お前の体が大丈夫なら……」

増田(MO)「私は子供の話題を避けた。頼子が何を言いたいか、何を言っただけか、わかっていたのに、そのことに触れることができなかった」

頼子の声「私は大丈夫。あなたも元気出して」

増田(MO)「頼子はいつものように笑った。悲しい事などなかったかの様に。全ては初

めから無かったのだ。私達は悲しみを無視する事で乗り越えた。私はそう思っていた」

バーの店内、グラスで氷が解ける音。低く流れるジャズ。

増田「私は最低なんです」

大西「(店員に)すみません、おかわり」

増田「どうせ、手紙には私の悪口ばかり書いてあったんでしょ？ 最低な夫だと」

大西「……さあ、どうだったかな」

増田「どうせ私なんか、私なんか……」

大西「(ため息)仕方ないな」

増田「ええ、仕方ない男だ……最低だ」

大西「……書いてない」

増田「え？」

大西「書いてませんよ、悪口なんて、一言も」

増田「え？」

大西「バカバカしい。手紙にはいつもあんたのことばかり。こっちは長年頼子ののろけ話聞いてやってたんだ。心の底から感謝して欲しいね。それが、どんなに男かと思

って来てみれば……グダグダ煮えきらない女々しいオッサンじゃないか、いったい頼子はどこがよかったのか、わからんよ」

増田「頼子が……頼子が俺をそんな風に？」

大西「ああ」

増田「頼子が……俺を？」

大西「ああそうだよ、しつこいな」

増田「本当に？ 本当に？」

大西「ああ、そうだよ」

増田「(泣き声)」

大西「すみません、この人にお水！」

増田「いや！ この人と同じの！」

大西「これラムだよ。酒弱いんでしょ？」

増田「同じの！ 同じのください！」

グラスの中で氷の解ける音。

増田(MO)「それまで溜まっていた色んなものが、いろんな毒が、ぱあっと砕け散ったような気分だった。誰かに、そんな風に気持ちをぶつけたのは初めてだった」

増田のいびき、寝返りをうつ音。

ドアがそっと閉まる音。

増田「(布団の中から)ん？ 誰か来た？ ……ああっ、頭痛っ。何時だ？ 7時か……」

カーテンを開ける音。

増田「ああ……晴れてるな。ね……大西さん」

増田(MO)「大西薫はどこにもいなかった。昨日そこにあっただけの大西のチェロも消

えていた。そして、頼子の遺骨も！」

エレベーターが開き、走り出てくる音。フロントに集まる客たちのざわめき。

フロント「おはようございます」

増田「あの、大きな楽器を持った背の高い男、見ませんでした？ この位の箱持って」

フロント「ああ、でしたら今タクシーをお待ちで……あ、あそこに」

増田「いた！ おい！ 待て！ 泥棒！」

自動ドアが開閉、駆けて行く。

大西「わっ！ 起きたのか！」

増田「何やってる？ 頼子を返せ！」

大西「いやだ！」

追いついてもみ合っている足音。

増田「ちよつと、どこ行くの！」

大西「いいだろ！ どこだって」

増田「返せ！」

大西「いやだ、頼子を海に流すなんて」

増田「な、何言ってるんだ今更！」

大西「あんたはいいさ、生きてる間ずっと頼子と一緒にいたんだ。でも俺は違う。俺は今まで手紙だけだ。妻と別れてからこの10年は頼子との文通だけが心の支えだった。なあ、これ、俺に出来ないか？ あんただって昨日、いらないうって言っただろ？」

増田「言っていない！ 返せ！」

大西「やだっ！」

増田「放せ！」

もみ合う2人。

新たに駆け寄る足音。

ホテルマン「お巡りさん、こちらです！」

警察官「こらっ！ 何してんだ」

増田「ええっ？」

警察官「あれ、あんた達昨日の？ ああ、ほら離れなさい。何やってんのいい歳して！」

「放せ！」 「嫌だ！」 と増田と大西のもみ合う声、警察官のなだめる声。

と、木箱が床に落ちる音。袋から粉が床にこぼれる音。

増田・大西「あっ！」

警察官「ん？ 何だ！ この袋の白い粉は！」

増田「よ、頼子が！」

警察官「こら、まさかあんた達……売人か？」

増田「頼子がこぼれた！」

警察官「よりこって、新しい隠語か？」

大西「違うよ、遺灰だよ！ この人の奥さんの骨！」

警察官「何だと？」

増田「頼子、ごめん！ 頼子おお！」

大西「早く集めて！ ほらお巡りさんも！ ああ！ 踏んじやダメ！ 足！」

警察官「え？ あ、すみません」

増田「うわっ、頼子が風に飛ばされる！」

大西「なんか掬うもの無いの？ そのホテル

ルの人！ 何かない？ 下敷きみたいなの」

ホテルマン「え？」

大西「早く！ なんか持ってきて！ 早く！」

ホテルマン「は、はい！」

バタバタと走り回る音。

増田(MO)「その場にいたみんなの協力で無事に頼子の遺灰を袋に戻し、警察官にガミと文句を言われた後、私達は船へと向かった。大西は朝起きて、頼子の入った桐の箱を眺めているうちに急に寂しくなり出来心で持ち出したのだと謝った」

沢山のカモメが鳴いている。

海原に行く船のエンジン音。

増田(MO)「昨日の雨が嘘のような、澄み切った青空だった。私達二人と頼子に乗せて、大型クルーザーは沖へ出た」

大西の具合の悪そうなるうめき声。

増田「ちよつと大西さん、大丈夫？」

大西「だ、大丈夫」

増田「弾けるの？ そんなんでチェロ」

大西「バカ野郎。俺を誰だと思ってるんだ。……俺は、プロだぞ……うっ……」

散骨プランナー「ここまで船酔いするお客様もそういらっしやらないんですが……」

大西「大丈夫だって言ってるだろう！」

増田、スタッフ女性の笑い声

散骨プランナー「では、このあたりで奥様を海にお送りしたいと思います」

増田(MO)「散骨プランナーの女性は、色とりどりの花かごを取り出した。私は頼子の好きなカスミ草もリクエストしてあった」

散骨プランナー「ではご遺灰にこちらの花びらを添えて海へ送り出しましょう」

大西「なんだ、そんな地味な花……頼子は華やかな赤いバラが好きだったはずなのに」

増田「え？好きな花はカスミ草だよ」

大西「それは、あなたの給料に遠慮して嘘ついでたんだよ」

増田「何ですと！」

増田と大西、吹き出す。

増田「どちらの面も頼子だったってことか」

大西「おう、認めるのか」

増田「私が寂しい思いをさせていた時、あなたが居てくれたおかげで頼子は元気を取り戻してくれたのかもしれない。納得はできないけど……一応礼を言うよ。ありがとう」

増田(MO)「あんなに憎らしいと思ってい

た男に感謝の言葉を言うなんて。自分でも驚いた。それは自然に出た言葉だった」

カモメの鳴き声とチェロの音色。

増田(MO)「それから私と彼は、頼子の遺灰をピンクや白の花びらと一緒に海へ送り出した。真つ青な海に落ちた白い頼子は、花びらと一緒にゆっくりと海へ広がり、優雅な生き物のように海を泳いだ。まるで解き放たれたように、ずっと帰りがたかった自然に帰るように、歌うように、笑うように、いつまでも青い海を漂う白い頼子を見て私は胸がいっぱいになった」

波の音が大きくなる。

増田(MO)「その時やっと私は気が付いた」

増田「頼子の最後のプレゼントって……」

大西「は？」

増田「……あなたのことだったのかも」

大西「何の話？」

増田「(笑って)いいえ。何でも」

増田(MO)「頼子。頼子がくれたプレゼント、受け取ったよ。君のことを彼と話していると、少しは元気になれそうだよ。ありがとう頼子。また会う日まで……」

波の音、カモメの鳴き声が遠ざかる。

(おわり)